

撃をかけ、衡陽を陥落したのである。

ちなみに、第十一軍（湘桂作戦の主力）の、昭和十九年九月十日（衡陽陥落後、第二期作戦発起時）の軍直轄部隊中の野戦重砲兵隊は、軍編成表によれば、野戦重砲兵第十七連隊長（佐藤平秋中佐）、独立野戦重砲兵第十五連隊長（佐々木孟久中佐）、独立重砲兵第六大隊長（内野貞利少佐）。他に独立野砲兵一個連隊、独立野砲兵三個大隊、独立山砲兵二個連隊、独立山砲兵二個大隊である。

## 湘桂作戦 第二期

新潟県 長 田 栄太郎

元第十三師団（鏡）歩兵第六十五連隊本部

昭和十九年八月三十日、湘桂第二期作戦が再開された。日本軍はいつまでも衡陽周辺に駐留しているわけにもいかない。長く駐留すると衡陽の人口七万、周辺

に日本軍十万、食糧は後方より補給がない、すべて現地徴発である。一刻も早く前進を開始し、敵の迎撃態勢がととのわないうちに桂林へ一歩でも近付くことが得策である。これが作戦再開の理由である。

衡陽攻略後、我が第十一軍は祁陽―零陵―全県へと進撃、これは作戦の前哨戦に相当するものであった。

我が軍は洪橋付近において中国軍を包圍殲滅する計画であった。軍は秋の日差しのないなな隊列は西に向かつて追撃戦を行った。どこまで続く果てることなき大地に、重い軍装を背負つての夜行軍が、毎日黙々として五〇キロ―六〇キロと歩き続き、所在の敵を撃破して前進する。夜行軍ばかりとは限らない、状況によっては日中行軍をしなければならない。この時は米機に狙われる最も危険なときである。制空権は完全に敵が把握して、友軍機は一機も来ることがない。空爆下の前進で桂林を目指した。突如として上空に爆音がある。兵隊は「飛行機、飛行機」と大きな声で連呼する。中国の苦力は「飛機来、飛機来」と天秤棒の荷物を捨てて身を隠す。隊列は散る。

昭和十九年十月中旬だと思ふ。新発田（新潟）歩兵  
第一百十六連隊の小行李と大宮市付近の軍公路で出会っ  
た。P 51七機の空襲で新発田連隊の馬が目標となった。  
会津若松の歩兵六十五連隊の通信中隊が連隊本部直轄  
部隊として前を行進して、この後に我が連隊本部が続  
いた。P 51七機は青天白日の中国のマークをつけた中  
国機であった。我が隊列に地獄の音をたてて二十ミリ  
機関砲より曳光弾を打ち込んで連隊本部にも襲いかか  
つてきた。路上に伏せをしていたとき、前方二〇メー  
トルぐらいまで着弾する危険を感じてすぐ左の南蛮畑  
に一人で隊より離れて飛び込んだ。敵機が撃ち出す機  
関砲の空気圧が戦闘帽の下の額を強く平手で打たれる  
ような感じで痛かった。こんな経験は生まれて始めて  
である。集団にいと狙われる。咄嗟に南蛮畑に飛び  
込む。考えたわけではなく一人で体が動いたのだ。前  
の縦隊は相当やられたようだ。今でも南蛮畑に飛び込  
んで生命が助かったのが不思議だ。

昭和十九年秋には、会津若松歩兵第六十五連隊の全  
戦没者の中に病死が極めて多い。毎日三人か四人、異

郷の地で病魔に侵されて遠く故郷を思いながらも、は  
かなく二十代の若い生命の灯が消えていった。露营地  
近くに戦友たちが墓穴を掘って埋葬する。コレラ、栄  
養失調、マラリヤ、疲労である。休養期間少なく無理  
からくる病魔で生命を失っていった兵隊たちの胸中は  
いかばかりか。

第十三師団の先進隊である会津歩兵六十五連隊は鳥  
坪峠を越え、十月末には標高二千メートルの寺背嶺の  
山腹を通ると眼下に湘江の流れが見えてくる。連隊の  
任務は桂林と柳州の連絡公路を遮断することであつた。  
十月末豪雨の中を鳥坪峠―寺背嶺を踏破。深山に野宿  
し、食糧の補給もなく、大自然との闘いであつた。

歩兵第六十五連隊はひたすらカルスト地帯（石灰岩  
の多いところ）の岩山道を歩き、馬の多い山砲隊は次々  
に馬が脚を痛めて脱落した。こんな情景のなかで米空  
軍の空襲はいよいよ激しくなってきた。こうした追撃  
戦はかなり速く、桂林・柳州の守備司令官だった敵の  
第二十七集団軍司令官・張發奎大將はなんと連隊に追  
い付かれ、仮寝の宿舎を奇襲され、彼の大事な実印を

置き忘れ、外被もかなくなり捨て身一つで逃げた。中国軍は、なすすべもなく敗走した。

こうした戦いの中で、三合の戦い、滝頭の戦い、冬田村の戦い、安馬壙の戦いで、多くの死傷者を出して広西省の西部山間地帯を進んだ。すでに秋冷ひどく、ボロボロの夏衣に寒さがしみこんだ。第十三師団の突進隊の仙台歩兵第一〇四連隊、続いて新発田歩兵第一一六連隊は金城江、南丹を攻略した。我が六十五連隊は山間地帯を前進し、遅れて思恩に突入したあと河内に出たのが十一月二十四日であった。破壊された町、どこまでも続く避難民の列、そして各所に炎上している置き去られた中国軍の車、山間の町に戦争の悲惨な姿があるのみだ。

十二月二日、仙台歩兵第一〇四隊新発田歩兵第一一六連隊は、西果ての地省境を越えて貴州省獨山に突入し、後反転して河池付近が第一線となった。私にはここで信じられないような奇跡が生じた。昭和十九年十二月五日夕暮れ、連隊本部は河池の付近で宿営することになった。宿舎の設営のためのその資材を取りに町

外れまで行ったとき、遠くP51の爆音が聞こえたので直ぐ空家の民家に姿を隠した。P51は後方の日本軍を攻撃した帰りである。それに見付かったのである。

戦友に山口上等兵がいた。彼は常磐炭鉱に勤めていたという。P51が近づいて来た。爆音がすごくなった。猫が一匹悲しそうに鳴いていたのが印象的であった。ズシーンと鈍い音がして伏せていた所の中国の民家の薄い屋根瓦がバラバラと落ちてきた。爆弾が落ちてくる音は羽根車が回るようなヒューンと音がする。最早これまでと思った瞬間妻子の顔が出た。

P51は去ったので、外に出て見た。なんと驚いたことに二発の投下爆弾が道路の脇の土のやわらかい部分に羽根車を上にして土の中に埋まり込んでいた。私と山口上等兵が伏せをしていた所より約八メートル、二発とも不発弾、まさに神の守護というほかはない。命が救われたこと全く不思議というほかはない。

撤退作戦後は師団司令部は宜山へ移り、歩兵第六十五連隊は師団の警備地区で最も西側の第一線を担当、板林村に連隊本部を置き、第一大隊は河内第二大隊を

金城江、第三大隊を五墟、また六墟に配属の山砲兵第十九連隊第三大隊を置き、警備生活に入った。

第十三師団の死者は約四千人にも達した。このほか六千人に上る負傷者を出し、師団の戦力を半分失った。会津若松歩兵六十五連隊の死者、九百人に上った。この中には永井博少佐、日置長一少佐など大隊長の戦死も含まれており、長途の遠征戦がどんなに苦しいものであったかを示している。

第一線警備の任にあたる若松歩兵六十五連隊では、警備生活だからといつてのんびりしているわけにはいかなかった。反撃に転じた中国軍は河池、五墟など連日のように繰り返し攻撃してきた。特に第一大隊の損害が増え、死傷者の数が増えた。また苗族のゲリラが忍んで来る。百姓の姿で日本軍の宿舎付近まで来て様子を調べる。夜間ゲリラは道路分哨に避難民に混じって手榴弾を投げ込む。連隊本部近くにおいた連隊長の乗馬が盗まれた。乗馬小隊が探しに行つたが見付からなかった。

二月ごろになって後方の全県付近の状況が悪化した

ため、第十三師団より一部兵力を抽出し沖天部隊を新編成することとなった。我が歩兵六十五連隊よりも転属していった。冬になつてもボロボロの夏衣のまま寒いので、兵隊は中国の布団を着て防寒服とし、夜行軍をして行つた。見送つた兵隊、見送られて転属する兵隊の心の中に寂しさを感じた。

このころ既に沖繩戦が始まつて米機は我が陣地にビラを散布、米艦隊が沖繩に接近していることを写真を入れて知らせた。印度のニューデリーよりの放送で「日本の皆さん」と呼び掛けがあり、河池で徴発した古いラジオから日本のメロディーの「サクラサクラ」「新内流し」のメロディーが流れてきた。兵隊に望郷の念をかりたてる。私一人通信中隊に行き、日本の様子を知つた。東京空襲、大阪空襲もこのころ知つた。前面に米軍戦車二百台集結、我が第十三師団の陣地を攻撃するといふ情報も入つてきた。携帯地雷で戦車攻撃などナンセンス、いろいろ乱れた情報が入つてきた。

兵隊に支給される雀の涙ほどの俸給は一度も受けたことがなかった。内地より手紙もこない。昭和二十年

四月十九日、都安作戦に参加後、連隊は警備地を撤退した。桃の花が咲き、小さな実がついていた。六月中旬連隊から砂塘村付近で食糧を得るため徵発命令が出た。連隊本部十五人くらいで途中行軍していると、次第に空が曇ってきた。楊という苦力が私に「向こうの山に中国兵がいる」と知らせたが私にはよく分からなかった。苦力の左側に井関上等兵、右側には私が歩いていった。雨が降って大粒の雨となつて激しく降ってきたが、雨宿りする所もなく、そのまま前進した。

雨が止むと、左前方よりチェッコ機関銃が一斉に我々目指して撃ち込んできた。井関上等兵は道路の左側の木の下に、私は右側の田圃の中に飛び込んだ。だれかやられたようだ。氏名の確認をしたが井関の声がない。みんなが井関を呼んだが返事がない。敵は激しく撃ち込んできた。我々も小銃で応戦したが敵は優勢である。後方に連絡を出した軽機と擲弾筒を持ってきて応戦した。

井関の戦死体にロープをつけて引つ張るとまた敵が撃ち込んでくる。ようやく敵を撃退した。もしこの時、

私が井関の位置にいたら私が戦死したに違いない。運命の別れ道がこんなところにあつた。

宜山周辺の情況が悪化し連隊の一部が出動することになった。私は残留した班長の山家健太郎軍曹（新潟県魚沼郡上野村）が出動するとき、私に「ここも情況が悪いから気をつけろ」と注意して出動した。三、四日して部隊が帰つて来た。大津兵長の首に白い包がぶら下がっている。だれだと聞いた。「山家班長！」とみんなが言った。私に気をつけよと注意した人がこんな姿になつた。運命のいたずらか。敵の機関銃にやられたという。

私は終戦後、山家班長の父親に手紙で戦死したことを知らせた。長岡で山家の父親と会つてその話をした。父親は病死でなく戦死だと聞いて心が休んだような気がしたが、息子の死を知らされた親の気持ちはどんなであつたらう。

桂林作戦の死者の遺骨は、慰霊祭のあと戦友の胸に抱かれて漢口の軍司令部に送られた。ところが当時日本は制空権、制海権を失つて孤立状態になつて内地に

遺骨を送り出すことができなく、終戦後遺骨が故国に帰ったのである。

私は五十年前の当時のことを思い出してこの労苦調査を書いているが泣けて泣けて涙が止まらない。二度と戦争はやってはならない。

## 【解 説】

### ― 湘桂作戦 第二期 ―

会津若松歩兵六十五連隊の、昭和十九年十一月下旬（歩兵第四百四連隊の獨山突入）以降、第十三師団等の獨山突入、湘桂作戦の重慶等に与えた影響などを記述し解説とする。

第十三師団は獨山攻略後、反転する場合を考慮して先に歩兵第六十五連隊に、長坡墟、河池、金城江確保警備を命じたが、偵察情報により、河池西北西二三キロの白残付近を確保しよう命じた。思恩を占領していた連隊は、ようやく師団と連絡が回復した。かくして二十九日警備配置を完了したのであり、河池、南丹

付近の重慶軍を撃破して師団はいよいよ広西、貴州の省境を突破するのであるが、河池付近から野車河、大廠付近では強い抵抗に遭って、その突破に数日を要した。

この付近にあった重慶軍は第四戦区の敗退軍でなく、新しく貴州省方面から来援南下したものであることを知った。

「坑戦簡史」によれば、

十一月二十一日、河池占領の日本軍は黔桂鉄道に沿って第七軍の警戒陣地を攻撃し、激戦三日に及んだ。我が軍の戦死者は極めて多く、このため二十四日夕刻、野車河陣地に向かい移動した。二十五日、日本軍は再び大挙して我が大廠東西の線に進攻するも、極力これを拒止した。二十七日改めて一部で我が正面守備軍を索制し有力部隊で野車河、大廠に突入して来た。二十八日南丹は陥落した。……

と、重慶軍の戦史に南丹等の失陥が記されている。

十一月二十八日午前十一時三十分、南丹を攻略した歩兵第四百四連隊（仙台）は、引き続き日没から獨山に

向け追撃した。到る所に戦車壕が掘られ行進は遅滞したが、重慶軍の退却も相当混乱したようであった。路上には重慶軍の自動車、山砲などが遺棄品が充滿し散乱していた。鉄道はしばらく公路に沿っていたが軍需品満載の二個列車に追及して、そのうち一個列車を完全に捕獲した。

鉄道は南丹から約二〇キロで公路と分岐しているが、連隊は鉄道に沿ってまず六寨墟（南丹北四二五キロ）に向かった。南丹―六寨墟間は谷地になっており、重慶軍とある時は一団となり、また相前後して前進したので地形の詳細まで調べる暇はなかった。

六寨からは岩塊が屹立<sup>きつり</sup>していたが、戦闘行動を阻害するようなものはない。南丹からは重慶軍と混交して一物も得られず、わずかに粉味噌、粉醬油を飯にふりかけて食べたことも再三であったという。省境を越えたのは十一月三十日であったが、省境には四十二リ口径自走の野戦機関砲二門が放置されていた。六寨に入ろうとする朝、米軍機が来襲して銃爆撃し住民多数を爆死させたのを皮切りに、米軍機は執拗に上空に

飛来した。第五航空軍の襲撃機は、米軍機の間隙を縫って師団の突進に協力した。

十二月二日、歩兵第百四連隊が重慶軍陣地を攻撃準備している夜半、山砲兵第十九連隊の主力が来着、攻撃を開始したが、重慶軍は米軍機の協力を得てきわめて頑強に抵抗、この日の米軍機の地上戦闘協同は、本作戦を通じて、その比を見ないほど見事に行われ、我が軍の攻撃は遅々として進まなかった。

十二月二日昼過ぎ、午後一時ごろ第一大隊から「一三〇獨山突入」との電報が入った。この予想をしない迂回隊たる第一大隊は、「獨山から平舟に通ずる道路に出た所、バラバラになって獨山から西進中の重慶軍が沢山いた。第二中隊長宮本大尉は先頭に立って、前方から来る重慶軍とすれ違いながら道路の一侧を東へ向かって急進して獨山に入り占領した」という。

連隊は、かつて押収した被服で全員が綿服に着替えていた（軍の補給なく寒さのため柳州北方において）。そのため重慶軍兵たちは我が軍を味方と思い敵対行為をしなかったのではなからうか。

第一大隊の獨山占領で重慶軍は俄かに崩れ始めた。

十二月四日天明とともに第百四連隊は第二大隊を先頭に続々獨山に入城した。重慶軍側の記録によれば、

「獨山陥落は、軍方面の無能を表し、守備軍は戦わずして退却し、巨砲、輜重はすべて放棄した。敵はなお数十支里外なるにかかわらず、我が軍は愴惶として逃亡し、流亡者に対しては完全に注意を払わず……」。自分の手で破壊する爆発音は、公路上の難民に敵の大砲の砲音と思わせた。第四戦区総司令部は米軍機の誤爆を受けたる以後、黔桂路の局面が日増しに下向きになるのを認めていた。しかし、獨山まで到着したとき、まさか日本の進攻をここまで予想していなかった……。

十二月四日、

①日没ころから反転準備を完了し、

②獨山付近の施設、工場、軍需品は工兵によって全部爆破焼燼、

③途中の洞窟等の爆薬庫、油槽庫等もなるべく焼き払う、

④鉄道、橋梁、隧道、通信施設も極力破壊しながら撤退する

等とし、反転は実施された。師団主力の獨山反転收容は、歩兵第六十五連隊が河池を占領して行った。

しかし、同連隊の警備した河池には十二月中旬早くも追尾した重慶軍が前面に出現し、重慶軍は第一七五・新編一九・第九五師が増強され、第一大隊長、第四中隊長は戦死した。第二大隊の金城江（湘桂鉄道・公路の要衝）。第三大隊にも重慶軍第四六軍が進出し第十中隊長以下多数の戦死傷者を出した。以後、同連隊は湘桂撤退作戦の殿軍となり、八月ようやく師団主力と合流することができた。